あとがき

関西大学地理学・地域環境学教室の教員・卒業生を中心にした千里地理学会という小さな学会が主体となり『ジオグラフィカ千里』第1号を創刊したのは2019（令和元）年の3月であった。学会としての規約も作り，会長は年長の専任教員がなることだけは決まった。しかし，会員資格は現職教員・退職教員と卒業生，現役学生・大学院生，それに教室・専修に関わりのある関係者というまことに緩いファジー（fuzzy）な組織であった。現時点でも学会費は徴収していない。

しかし夢と理想はある。小さな組織ながらも学部・大学院とも，独自の専修（学部は地理学・地域環境学専修，大学院は地理学専修）と独立したカリキュラムをもっている。大学院は一貫制博士課程で，学部，博士課程前期課程，博士課程後期課程それぞれ独立に講義や演習が開講され，授業担当の非常勤講師も兼担はしていない。

しかし，在学生や卒業生が自らの研究成果を，地理学の名称を冠して，全国学会誌よりは自由に書ける媒体がなかった。そこを『ジオグラフィカ千里』は狙った。

近年は査読ジャーナル，国際的な英文誌しか存在意義がないという研究者世界，学界の傲慢な風潮がある。そこに風穴をあけたい。高いオリジナリティと一流だけをめざしても，だれもがそこに到達できるわけではない。準備・構想段階の荒削りな論考，総説や研究のレビュー，モノグラフ，教育実践報告など，細かく内容種別を区別せずに，おおらかに受け入れて冊子を編む。これがこの不定期刊の学術雑誌の意気である。

第1号は伊東理教授退職記念号として「都市空間の地理学」（2019年3月），第２号は刊行が遅れたが，木庭元晴教授の退職を意識して「自然地理学の新たな地平」（2022年3月）の特集を組んだ。今回の第３号（2024年3月）は私の退職記念号として，「地誌学万華鏡－俯瞰・比較と応用」というタイトルの特集号とした。私が関西大学大学院では地理学専修の「地誌学・地理教育研究」という専修科目の担当であることに由来するが，それ以上の深い理由はない。ただ執筆を呼びかけた際の書状には「現代の地誌，歴史地誌的な内容のモノグラフや実証研究，地誌方法論などについてご寄稿賜れば幸いです。ただし，衒学的な内容のものはご容赦ください」とした。「応用」とは，私の関係者には地理教育の現場にいる教員が多ことも念頭においた。地誌と地理教育の連携である。

私の研究スタイルは，日本の狭い地域からアジアをはじめとした世界の特定地域までを扱うが，フィールドワークを主体にして，さまざまな史資料の分析，観察，計測，統計分析から明らかにする姿勢は揺るぎない。そこでは，時空を軽やかに彷徨し，比較し，全体を見わたす視点を意識してきた。綿毛・けばのような曖昧さなかたち――ファジーな対象を，万華鏡の鏡筒をまわして試行錯誤しながら収束点をめざす身構えである。それが結果的に失敗に終わってもいいではないか。

私の敬愛するタイ研究者の石井米雄先生が74歳にときに若い人にむけて書かれた自叙伝の書名は『道は，ひらける－タイ研究の五〇年－』（めこん，2003）である。タイ

に行きたい，タイ語を極めたいがために，大学を中退してまでもノンキャリア外交官の道を選ばせた。「タイの現場を踏みたい」という強烈な動機が，その後の意外な思わぬ道筋をつけてくれた。まさに，道は，ひらけるのである。

私も，学生には自らのテーマやフィールドを押しつけないで，自由にやりたいことをやらせて，要所だけはしっかりと助言し，袋小路に迷わないように道先案内する。これが私の方針である。

研究に特化したと自称する大学・大学院や研究所が，グローバル化のかけ声ときびしい競争で慢性的な制度疲労をおこしていると外野席からはみえる。私が奉職した4つの大学はいずれも研究に特化した大学ではない。研究はひとつの選択肢にすぎない。そのなかで，大学院に進学，あるいはそれが叶わなくても，現場で経験を積みながら研究を続けられるサポートを陰でしてあげたい。まだ，正規の就職が叶わない著者もいる。その一方で，持ち前の馬力でキャリアアップし今の地位に上り詰めた人もいる。そこに慢心してはいけない。狭いテーマに絞ったために博士の学位は順調に取れたが，その後はすっかり研究が停滞した中堅を何人もみてきた。若くしてすばらしい大著を上梓しながら，その後はその余択で定年を迎える人もいる。

今回の特集号の寄稿者44人は，私が声かけをした多士済々の一部である。締め切りに間に合わずに投稿を断念した人も何人かいる。その方々に再挑戦の機会を準備するのも私の役目と思っている。掲載された40の論考は，私が25歳で奈良大学に助手として勤務してから今日までに関わってきた人たちで，私よりも年少という以外，共通点はない。大きくは，私が勤めた4つの大学――奈良大学（4年），滋賀大学（10年），奈良女子大学（9年），関西大学（22年）での直接の教え子やそのときどきの関係者，関西大学に非常勤講師として出講いただいて交誼を得た方々，大型科研費などの共同研究で苦楽をともにした大学教員など幅広い。現職の肩書きも，博物館学芸員，自治体研究所の研究員，小中高等学校の教育現場を経験した人など多彩である。共著もある。これも献呈論文集にはない特色だと思う。広義の地理教育に相当する論考も9本集まった。それらの実践報告にも地べたに足をしっかりつけ地域理解が基層にある。

これから新たなキャリアを目指して査読を希望された方には，論文に【査読論文】という区別を論文の冒頭に付したが，それ以上の他意はない。論文の評価は，関西大学のレポジトリに登録され，オンラインで公表され，世界中でだれでも閲覧，ダウンロードできたあとにおのずと出てくるでもあろう。

すべての寄稿者との人間関係は私にしかわからない状況のなか，今回の異色の論集の編集にかかわり，膨大で面倒な原稿の依頼・催促，校正の受け渡しの労をとっていただいた松井幸一氏には感謝しかない。このような私のわがままを認めていただいた関西大学地理学・地域環境学専修の黒木貴一・土屋純教授にもお礼を申し述べたい。

令和6（2024）年2月吉日

野間　晴雄